

京都大学	博士(文学)	氏名	吉川 順子
論文題目	ジュディット・ゴーチエによる詩のジャポニスム —— 和歌翻訳集『蜻蛉集』の成立過程とその文化的背景		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>序</p> <p>本論文はフランスの作家ジュディット・ゴーチエ(1845-1917)における東洋文化受容の意義を問い直そうとするものである。ジュディット・ゴーチエは19世紀半ばから20世紀にかけて東洋趣味の作品を著したことで知られる。だが、作品の豊かさに反して、これまで本格的な研究は行われてこなかった。特に、ジュディット(父親で高名な作家テオフィール・ゴーチエと区別するため、以後ジュディットと表記)の文学の本質を明らかにすることを目指して個々のテキストを分析した研究はほとんどみられない。確かに当時の東洋趣味の作品はしばしば誇張や誤解を含み、深い表現を欠く場合も少なくない。しかしジュディットについては、東洋趣味以外の文学活動の多様性に鑑み、表面的な東洋趣味とは一線を画す東洋文化受容の意義が存在したのではないかと推測できる。その意義を問い直すことは、彼女の文学の再評価に繋がる可能性があると思われる。</p> <p>そのひとつのアプローチとして、本論文では、この作家におけるジャポニスムのあり方を詩の翻訳を通して考察することとした。ジャポニスム研究は19世紀から20世紀に至る西欧諸国の美術を始め、建築、音楽、思想、演劇、小説、詩歌等あらゆるジャンルを対象を広げ深化してきた。しかし、詩歌のうち俳句の受容は多く論じられたが、俳句より先にヨーロッパに紹介された和歌については十分に考察されていない。その和歌の受容を通して〈詩のジャポニスム〉を開花させたのがジュディットの和歌翻訳集『蜻蛉集』(1885)である。小説や戯曲ではなく、極東詩の翻訳に着目するのには理由がある。第一に本格的な文学活動開始前から個人的に試みられていたこと、第二に商業的事情を度外視して出版されたこと、第三に自由な翻訳で、原詩と訳詩の差に作家の創意が読みとれることである。これらのことから、詩の翻訳を通して、ジュディットが純粋に極東のどのような点に関心をいだき、そこからいかに自らの文学を創造したのかという問題に迫ることができると思う。</p> <p>第一章：和歌翻訳集『蜻蛉集』——詩のジャポニスム</p> <p>第一章では、いまだ研究の乏しい『蜻蛉集』をとりあげ、成立の背景や作品の各側面を明らかにしたうえで、特に訳詩のテキストを分析した。そもそも日本語に精通しない作家が和歌翻訳にとりくんだことには、創作的な意図の存在を推測せずにはいられない。しかし既存の研究には、下訳をした西園寺公望の視点から回顧するか、挿絵</p>			

を描いた山本芳翠の作品として調査考察したものしか存在せず、ジュディットによるテキスト自体の価値は顧みられなかった。

1860年代から80年代はフランスで日本学が確立された時期で、日本詩歌の研究も始まっていた。だが、学者による忠実な和歌翻訳に対し、『蜻蛉集』は出典を明記せず、和歌の形式を模して、翻訳の困難を伴う韻文訳を行い、挿絵を添えるという、鑑賞を優先させた体裁をもつ。また韻文訳という方法は、当時の詩人たちが中国詩の形式を模して作詩を試みた先例から影響を受けたものだった。じっさいジュディットは、『蜻蛉集』以前の小説で和歌と中国詩の形式を混同している。これは『蜻蛉集』制作の動機が、和歌翻訳の発展上ではなく、外国の詩に対する詩人たちの関心の延長線上にあったことを示している。

『蜻蛉集』が独立した作品として制作されたことは本書の様々な側面からも確かめられた。それはとりわけ自然という主題に集約される。まず書名は、訳詩がトンボの羽によって運ばれてきた詩であることを示唆していると考えられる。このことは、韻文訳により実現された極端に小さな詩という形式からも強調されている。また、挿絵と訳詩の配置によって、詩が自然のなかに潜んでいるように演出されていた。さらに『古今集』「仮名序」から歌の発生を植物の生育になぞらえた部分を中心に抄訳して巻頭におき、かつ大半の歌を『古今集』に始まる八代集から選んでいた。自然にまつわる歌、なかでも花の歌を多数集め、献辞と末尾の歌で詩を花にたとえて円環を構成する配慮もみられる。

自然という主題の重要性は、翻訳手法にも表れている。西園寺の下訳を逸脱して、自然の事物に語りかける形式を導入したり、動植物が人間と同じような営みをするさまを強調したりすることで、自然を擬人化している。そして原詩にない人間の悲嘆や苦しみを誇張する表現を加え、「強い自然」と「弱い人間」という図式を構築している。

「仮名序」抄訳では、生きとし生けるものすべてが歌を詠むという理を述べた箇所が「自然から詩を教えられる」と意識されている。これは上記のような特徴に照らせば、単なる誤訳ではなく、『蜻蛉集』に作者自身が織り込んだ主張だったと解釈せざるをえない。このように本作品のあらゆる側面に訳詩集を独立した作品として成立させる意図があり、そこに込められた独自の主張があることが明らかになった。

第二章：中国詩翻訳集『白玉詩書』と散文詩——初期の詩観

だが果たして作家は翻訳が作品とみなされることを意図していたのだろうか。また自然の強さの前に無力な人間という主張は、ジュディットの文学においていかなる重要性を有するものだったか。これらを解明するため、第二章では、『蜻蛉集』に先立って出版された中国詩翻訳集『白玉詩書』（1867）に立ち返る。この作品の先行研究には、中国詩受容の先駆的役割を評価した比較文学的見地によるものと、この翻訳が散文訳であることから散文詩の発展上に位置づけようとしたものがある。ただ、いずれも

訳者の意図を考慮してはいない。それゆえ本論文は、作品成立の背景や作家の詩観を調査するとともに、等閑視されてきたプレオリジナルを発掘して訳詩集の成立過程を分析した。

出版当初からあった『白玉詩書』の散文訳を散文詩になぞらえる見解は、いずれもテキストの印象や散文詩の流行に追従しただけで、作家の証言にもとづくものではない。それに対して本稿による調査では、ボードレール、ベルトランといった散文詩流行の立役者たちがジュディットにとって身近な人物であり（翻訳発表の場を提供したウーセもその一人だった）、作家自身も形骸化した韻文に違和感を感じて散文詩に関心を寄せていたことが判明した。

また訳詩集成立過程の分析から、当初は訳詩に作者名すら記していなかったことや、章立てのために語彙を調整したこと、一篇の詩を分割して再録したことなど、原詩への忠実さよりも独自の編纂方針を優先していたことが明らかになった。その一方で重視されたのが散文訳の構造や文体の推敲で、それにより詩の主題が明瞭になったり、詩情の生まれる場が再構築されたりした。つまり『白玉詩書』からも、ジュディットによる翻訳が独立した作品としての性質を帯びていたことが確認された。

さらに主題面の検討では、章分け用の主題が便宜的である一方、加筆を通して人間と自然の対比や擬人化された自然が強調されていることが明らかになった。これはアナロジーを示す表現が頻出し、物事の類似性や地上には唯一の法則しかないという見解が繰り返し強調されていることから裏づけられる。詩作を自然現象にたとえたり、詩人に自然をまねよと訴えたりする詩もある。これらの主題は『白玉詩書』の後に制作された作家固有の散文詩作品群（1872-1873）にも引き継がれ、散文詩形態の試みにおける重要な主題だったことも明らかになった。この作品群では一貫して、猛威を振るう自然を前に自我を手放して広大な宇宙に融合してゆく人間が描かれている。その根底には、世には確かなものも定まった形もないという思想があった。『白玉詩書』の散文訳も、人間の営みを自然現象に集約したり、自然の原理にならえと訴えたりする箇所があることを想起すると、このような人間はより大きな法則に動かされているという認識も、作家が固定された形、つまり伝統的な詩形を放棄して、散文詩を試みる動機になったと考えられる。

以上のような万物の理を再認識するという主題は、自然のなかに人間に関する知見を見出そうとした『蜻蛉集』に通じる。両訳詩集には、それぞれにふさわしい詩形を模索する過程で、人間の定めた伝統的形式を放棄した散文訳と自然がもたらしたかのような小さな韻文訳という相違は存在するものの、いずれも自然を前にした人間のあり方を問うた結果だった。『蜻蛉集』に織り込まれた主張は、日本文化だけでなく中国文化の受容をも通して作家により追求されつづけたものであり、ここに単なる東洋文化の模倣ではなく、それを自らの詩的理想の表現に利用したジュディットのジャポニスムの形をみることができる。

第三章：書評・美術批評・音楽批評——ジュディットと自然

このような人間と自然をめぐる主題は、日本や中国文化を通してのみ深められたのだろうか、当時のフランスが経験した様々な事象の影響をも受けていてしかるべきではないかという疑問が当然生まれてくる。第三章では、ジュディットの同時代の書評・美術批評・音楽批評をふりかえり、彼女の東洋文化以外の作家の関心について調査した。

まず初期の書評（科学の大衆化をめざして人間を超える地球の営みを説いたルイ・フィギエの書物や、宇宙のすべてが融合に向かうという理想を掲げたポーの作品の書評）を通じて、ジュディットが人間・自然・宇宙を相対化し、自然や宇宙の営為に目を向けるとともに、そのなかで人間の位置を認識しようとする意識を高めていたことが判明した。

また美術批評からは、作家がモデルの卑俗さまでをありのままに描くリアリズムを批判する一方、リアリズムと無関係ではない風景画、とりわけ自然回帰を唱えたバルビゾン派の作品を例外的に高く評価し、自然のもつ美に特別な信頼を寄せていたことがわかった。風景画以外を批評する際にも、主たるモチーフより背景の自然に注目していたことが特徴である。また、自然の比喩を多用したり自然を擬人化したりして批評したうえ、人間が自然に融けこむさまを描いた作品を称賛した。読者が批評を通して多彩な自然を経験できるように作品をたどる工夫も施していた。

ワーグナーのオペラを中心とする音楽批評からは、作曲家によって川や森にたとえられたメロディー、すなわちオペラにおける音楽の一体性をめざした無限旋律に関心を示し、それを作曲家以上に、生き物のごとき生気を秘めた川や森とみなしていた。また個々の作品解説には、ワーグナー作品が自然描写に長けている点に強く感応していたことが表れている。ジュディットはドラマの筋よりも、海や空といった自然の描写を作品から抽出したほか、とりわけ「自然から歌を学んだ」と歌われる場面に特別な関心を示した。これはまさに『蜻蛉集』の「仮名序」の抄訳で、生きとし生けるものすべてに歌があるという箇所が「自然から詩を教えられる」と意識されていたことと符号する。さらに音楽とドラマの関連性を述べる際にも、出来事や人物の感情より、水や光や空気といった自然の要素を音楽が表現している点に関心を寄せていた。以上の検討から作家は、ワーグナーの音楽が何より自然の神秘性の表現に優れていると理解していた点が浮き彫りになった。

これら同時期の批評にみられる見解は、いずれも『白玉詩書』や散文詩作品群、『蜻蛉集』における自然と人間にかんする主題へと通じるものである。

結び

以上の分析を通して本論文は、ジュディット・ゴーチエのジャポニズムが表面的な

異文化摂取ではなく、日本文化の受容に先立つ中国文化の受容、さらには自国における知的変動を土台とし、それに対する作家独自の見解が積極的に投影されたものであることを明らかにした。作家が残した多様なジャンルにわたる作品はフランス文学研究において長らく等閑視されてきたが、本論文が明らかにした自然と人間という主題を切り口に、その本質と意義が改めて問い直されるべきである。

(論文審査の結果の要旨)

吉川順子氏の論文「ジュディット・ゴーチエによる詩のジャポニスム——和歌翻訳集『蜻蛉集』の成立過程とその文化的背景」は、フランスの作家テオフィール・ゴーチエの娘ジュディット(1845-1917)が1885年に出版した和歌翻訳『蜻蛉集』*Poèmes de la libellule*の成立過程とその意義を詳細な文献学的考証と文化的背景の調査を踏まえて明らかにした研究である。

第1章で論者は、本作に関する研究史を網羅的にふり返り、『蜻蛉集』成立の背景(作家と極東との出会い、先行する翻訳和歌集、下訳をした西園寺公望および挿絵を描いた山元芳翠の貢献)を精査したうえで、『蜻蛉集』の書名、挿絵、収録された和歌の出典と主題を明らかにし、さらに下訳との異同や翻訳手法の詳細な分析を通じて「韻文訳」の意義と文体を浮き彫りにしつつ、『蜻蛉集』が単なる翻訳ではなく、作家本人の自然と人間をめぐる独自の文学観をあらわす「創作」であることを立証した。

第2章では、『蜻蛉集』に表れた作家の文学観の成立の背景を明らかにするため、論者はその18年前に出版された中国訳詩選『白玉詩書』*Le Livre de Jade*を詳細に調査した。研究史を整理したうえで、散文訳翻訳をうながした当時流行の散文詩との比較、原詩の特定と照合、雑誌に発表された翻訳のプレオリジナルと出版された完成稿とのあいだに認められる加筆訂正などの分析を通じて、自然への帰依、自然との対比、自然の擬人化などの主題や技法を抽出し、それがジュディット本人の詩作品成立の契機となったことを論証した。

第3章において論者は、作家のこのような自然への関心の背景を探るため、1860-70年代にジュディットが発表した書評、美術批評、音楽批評を考察し、『蜻蛉集』と『白玉詩書』を成立せしめた詩人の感性と自然観が当時のフランスの知的・芸術的潮流からいかに多くを汲んでいるかを明らかにした。

吉川順子氏の論文の長所として第一に挙げるべきは、フランス文学研究で等閑視されてきた翻訳和歌集『蜻蛉集』を正面からとりあげ、東洋文化の受容という比較文学的見地や、ジャポニスムないし美術史の観点からのみ採りあげられてきた訳詩集について、作者の文学的変遷と当時の文化的背景という両面から総合的に解明することに成功した点である。

本論の第二の特徴は、論者の本主題をめぐる文献学的調査が網羅的かつ堅実なことである。論者が『蜻蛉集』と『白玉詩書』の両翻訳について、フランス語読解力のみならず日本と中国の古典に関する素養を駆使しつつ、19世紀の雑誌に発表された関連資料や訳詩のプレオリジナルを独自に発掘し、簡略化された作者名とタイトルメモから原詩を特定したうえで、原典と訳詩(プレオリジナルと詩集との異同を含む)と比較照合するという独自の綿密な文献学的調査に基づいて結論を導き出す手法は、本論文の特筆すべき特徴として高く評価できる点である。

第三に評価されるべきは、これらの実証的調査に依拠して、本論が従来の研究では

未解明だった数多くの新知見をもたらしたことにある。とくに『蜻蛉集』の翻訳手法を綿密に分析して、音節数と行数を統一して韻を踏ませた定型訳が、じつは原典本文をかなり逸脱した詩人ジュディットの文学を確立する創作であることを立証したこと、『白玉詩書』のプレオリジナルと詩集を綿密に比較照合したうえで、セミコロンの多用や行数変更などの原典への加筆訂正にむしろジュディット固有の文学の成立を読みとり、直後に出版された小説『皇帝の龍』(1869)に訳詩の再利用だけでなく、訳業で習得した作詩術を駆使した創作詩が組み入れられていることを明らかにしたことなどは、『蜻蛉集』および『白玉詩書』の研究史を一新する成果と高く評価できる。ほかにも『蜻蛉集』翻訳のアイデアが10年前の小説『篡奪者』(1875)に認められることを立証するなど、細かい新知見は枚挙に暇がない。

本文だけでなく注に記された細かな補足事項も全体として信頼のおける調査に基づいており完成度の高い論文であるが、疑問点もなしとしない。とくに1章、2章、3章と論旨がしだいに拡散して十分に結論に収斂しない点は、論文全体の構成を含めて再検討を必要とする。論者がとりあげた「自然」という概念についても、さらに広範な歴史的視野から補足する必要がある。しかしこれらは論者の今後の研究課題とすべきところであり、本論文の価値をなんら損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2011年2月4日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。